

本との出会いを楽しむ 第5回

ゲームとしての読書

大学院医学研究科 助教 二ノ倉 欣久



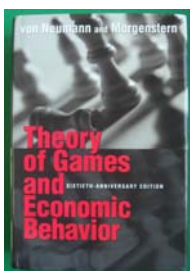
弘前大学のみなさまこんにちは。私は認知・判断や運動といった用語に代表される脳機能を細胞レベルでの実験的現象から理解することに興味を持ち、研究や教育に従事しております。器官としての脳の性質を考えますと、マクロな人間世界とマイクロな物質世界への両方への興味をもつことができれば都合が良いのですが、人間世界を特徴付ける「社会」を物質世界を理解するように「わかる」のはそう簡単なことではありません。ある現象の定量的な理解のためにはどうしても数理的な道具立てが必要ですが、このための有力な理論をまだ我々は十分整備していないからです。

よく知られた理論としてはノイマンのゲームの理論⁽¹⁾がありますが、ノイマンの理論を実際の現象に当てはめようとすると簡単ではないことがすぐに判りますから、誰でも二の足を踏みます。こうして私の脳研究と社会を接続する試みもある地点から先に前進しなくなりました。実験をするものにとっては観測した実際の現象をよく説明できない理論にはあまり意味がないように思えるからです。

ところが意外なところでノイマンの理論をうまく応用した具体例に遭遇しました。それはグライフ著『比較歴史制度分析』⁽²⁾で、個人的に強く印象に残っています。古くはヘロドトスの「歴史」に「慣習(習慣)こそ万物の王」と記載されるように、我々は合理的に行動するだけでなく慣習や制度によって一見不合理に見える行動を選択することがあります。では、一見不合理

に見える行動選択を可能にする誘因(インセンティブ)が社会の慣習や制度にどのようにして埋込まれ、保持されるのか?そして安定化したそれら誘因はどのように変化し慣習や制度に作用したか?といった挑戦的な疑問(戦略的行動形成の理論)に対して、新規に発掘された書庫の中世後期の地中海世界の膨大な商取引およびその関連記録から抽出された記録を、ノイマンモデルに依拠して数理的に解析することで部分的に解答を与えようという野心的な試みが本書の主題となっています。定量化しやすい商取引資料が大量に発見されたという前提があるとはいえ、そこでは発掘された一次資料(データ)をつぶさに観察することで仮説を立て、仮説をもとにモデルを構築し、モデルとデータとの間の齟齬からモデルを修正し新たな仮説を提起という一連の科学的手続きがあり、人間集団(社会)の振る舞いを規定する慣習や制度の生成過程の一端をかいまみることができます。

本書は歴史書ではあると同時に科学書としても成立しているところがおもしろいところで、理科系文科系どちらの学生の方にもどこかに興味を持てる場所があるのではないのでしょうか?(1)を読み通すのが困難であれば(2)の巻末に数理的背景の説明もあります。私個人としては一見無関係に見える分野であっても主要な争点にはしばしば共通点がみられ、それらを連結することで新しい学問が生まれる過程を確認する得難い読書体験でした。(このくら よしひさ)



(1) Neumann JV & Morgenstern O.
"Theory of Games and Economic Behavior"
(Princeton Univ. Press, 2004)



(2) アブナー・グライフ著
『比較歴史制度分析』
(NTT出版, 2009年)

二ノ倉先生にご紹介いただいた(1)の和訳本『ゲームの理論と経済行動』(5分冊)を本館で所蔵しています。
所在: 本館旧書庫3~5層 請求記号: 331.1/N67/1 図書ID: 90645100 他